

田 阪 美 徳 (たさか よしのり)

佐 藤 昌
(社)日本公園緑地協会会長

広島県三原市に生まれ、大正9年(1920)東京帝國大学農学科卒業後、直ちに明治神宮造営局に勤務し、折下吉延技師の下で、主として外苑造成工事に携わった。大正15年、明治神宮御造営の工事完了後、明治神宮外苑管理署技師として、その管理を主宰し、ついで昭和11年、内務省神社局の技師に転じ、全国の官幣国幣の神社は勿論、府県社以下の神社の境界の村苑の整備を指導した。昭和12年紀元2600年記念事業として行われた橿原神宮の整備には、誠心誠意事に当たり、その内外苑の整備を美事に完了した。

昭和21年、進駐軍命令によって内務省が解体され、神社局が廃止となるや、東京都建設局公園緑地課長の職を井下清より受け継ぎ、戦争中荒廃した都の公園緑地の復旧整備に尽力し、またわが国初めて地方公共団体での公園協会を設立して管理に新体制をつくった。当時戰時中農耕地として食糧増産に協力していた公園は、農地解放政策によって買収の対象となるものが多くなったが、田阪は公園用地の減少を最小限にくい止めようとして日夜努力し、米軍司令部、農林当局、耕作者に対して陳情説得に大いに努めた。都市計画上必要な用地の五ヶ年保留が認められたのは、其の頃であって、田阪もまたこれに努

力した一人であった。これら的心痛労苦は遂に昔患った結核を再発せしめ、ために昭和24年11月、入院加療の止むなきに至り、27年遂に東京都を退職した。健康を回復した田阪は再び明治神宮の嘱託となり、その内外苑の林苑管理を指導した。その間、林苑の崇敬、審美並に自然的管理に新機軸を出した。

或いは茶室の新設、菖蒲園の整備を行った。神宮の菖蒲は全国の公園に無償で配布せられ、その美を誇っている。昭和45年大阪の万国博覧会における政府出展の日本庭園については、設計委員長として熱心に指導したが、遂にその完成の姿を見ずして逝去した。

田阪は謹厳実直であったが、常に温顔をもって人に対し、部下をよく教育した。また趣味は高尚で、和歌及び俳句をよくし、九亀の号を以て歌集、句集を出している。生涯独身で婚らず、常に酒を友として悠々自適した。彼の歌に、「わが家は先祖代々酒のみになり、われは酒を止めんと思わず」というのがあり、その面白躍如たるものがある。

